

Title	洪可臣の賊退後封事
Sub Title	
Author	高橋, 琢二(Takahashi, Takuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.4 (1925. 12) ,p.30(498)- 30(498)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19251200-0030">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19251200-0030</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 洪可臣の賊退後封事

文祿二年(李昭の二十六年)講和問題から秀吉の朝鮮出征軍が南鮮に撤退して義州に蒙塵してゐた國王李昭が京城に還るを得た時、其の臣洪可臣は國家の中興を庶つて長文なる一篇の國政釐正意見書『賊退後封事』を上つた。此は彼の詩文集『晚全集』に收められてゐる。侃諤の論であるが、吾人は寧ろその政治上の弊害を陳べた文字に興味を覺える。試に左に當時の人民の戰禍の巷食官の治下に於ける慘憺たる有様を叙した一節を抄出して見よう。

殿下即位以來、歲比不稔、民失其業、役煩賦重、而無樂生之心久矣、加以守令利於肥己、作名目而誅求、邊將急於酬債、設差備而漁奪、繭絲重於保障、鞭扑先於撫摩、上之使下、不以人道、下之視上、疾若仇讎、至於賊變之後、子遺之餘、其窮困益甚、渙散亦極矣、膏血已竭而刀鋸之割剝不止、筋力已盡而雞犬之驅催日急、離鄉去土、餓殍相望原野、棄子遺妻、顛仆不絕於道路、怨上之言、不啻祁寒暑雨之咨、召敵之心、無異干將鑿鄒之慘、死長之議、不敢望而倒戈之變、深可虞也

慶長元年(李昭の二十九年)鴻山の庶民李夢鶴が叛して湖内の六邑を陥れ、洪可臣は洪州牧使の職にあつて之を討平した。彼が『倒戈之變深可虞也』と云ひたるの後三年である。……(高橋琢二)